

# 清らかな闇 — 神嘗祭 —

ふるさとの風  
～神無月～

神宮では年間千五百以上もの祭が行われているが、その中でも「神宮のお正月」と呼ばれ重要なのが「神嘗祭」である。

神嘗祭に至るまでは二月の祈年祭に始まり、大きな祭だけでも十三を数える。

神嘗祭当日の十月十五日、内宮中重なかのえにおいて、「御卜みうらの儀」が行われる。これは、祭主以下奉仕者すべてが、神の心になんかっているかどうかを占う行事である。

まず、所役の者が一人一人の職名と名を読む。それから息を吸い込む口笛くすぶきを鳴らし、もう一人の所役しやくが笏しやくで琴板をコンと打つ。

「〇〇 ビュッ コン」

このリズムが揃うと、神意になんかって大祭の奉仕資格があることになる。

そして午後十時、いよいよ外宮において由貴夕大御饗祭ゆきのゆうべのおおみけさいが行われる。

祭主をはじめ、純白の装束を身につけた奉仕員が、松明の明かりとともに参進する光景・・・

空に浮かぶ月のほのかな光によって、足元の玉砂利は無数の星のように白く光り、幻想的な世界をつくり出す。

この闇夜のことを、神宮では「浄闇じょうあん」と呼ぶ。

—— “闇”・・・廟門で問い、闇々として訴え、これに対して神の「音なひ」があらわれることを闇という。それとなく、人知れずあらわれるものであるから、幽闇の意が生まれる。この字を暗愚のように用いるのは、甚だ神意にそむくものというべきであろう。

(白川静「字統」より) ——

※「音なひ」=気配・訪れ

神々しい闇のなかで、初穂を捧げる神嘗祭。豊年に感謝し、永遠の栄えを祈る、瑞穂の国ならではの  
の大祭である。

- ◆ 伊勢神宮 知られざる杜のうち (矢野憲一／著 角川学芸出版 L174／ヤ)
- ◆ 神宮要綱 (神宮司庁／編纂 神宮司庁 L174／ジ)
- ◆ 伊勢神宮 現代に生きる神話 (宮沢正明／著 岩淵デボラ／英訳 講談社 L174／ミ)